

新しい手術・画像診断の進歩

座長：薩 摩 眞 一

主題タイトルにあるように、6 題それぞれに新しい着眼点からの発表であった。

西須らは(千葉こども病院), 小児期骨病変の外科的処置に伴う成長軟骨帯損傷を予防する配慮から, 適応のある病態を選択して骨髄鏡手術を試みてきた. その結果, 合併症を有するケースは見られず, 安全かつ有効な術式と報告した. テクニカルに習熟できれば, 他施設でも十分考慮されてよい方法と考えられた. 和田らは(佐賀整肢学園), 臼蓋後壁欠損の著しい症例に西尾式臼蓋形成術を応用した 3 例 4 股について報告した. 全例で結果は良好で安定した整復が得られたとしており, Salter, Pemberton などに対応できないケースに対する臼蓋形成の一指針を示した. 野村らは(金沢大学), 先天性下腿偽関節症に対して Taylor Spatial Frame とロッキングプレートとの conversion method の 1 例を報告した. 長年多くの研究者が治療に難渋し, 今なお最適な方法が確立されていない疾患なので, 今後症例を重ねてもらいたい. 若林らは(名市大), 遺残性亜脱臼に対し MRI で将来の臼蓋発育を予想できないかを試みた. その結果, 3 歳ごろの T1・T2 骨性臼蓋角の差が発育良好群と不良群を区別する指標になるのではないかとした. 今後症例を増やして, 再現性を担保する試みが必要と思われた. 鎌田らは(筑波大学), 先天性股関節脱臼の関節唇を 3D MRI において形態学的に評価した. 骨頭入口径が整復方法を選択する指標になり得るという興味深い結論であった. ただ, 先股脱の整復方法については現在なお議論のあるところで, あくまでも保存的治療にこだわる施設では 100% に近い整復率であることを報告しており, 今回の結果は現時点で保存 or 観血の普遍的な指標とまでは言えない. 藤原らは(大阪医大), 脊柱側弯症患者における被曝低減の試みを報告した. 画像処理のみで低減が可能で, 治療側に読影に値する画像が提供できるということなので, なお一層の研究を進めていただくことと, 現場への情報提供を広く行えるような試みを期待したい.

いずれの演題も小児整形外科領域の将来において, 診断と治療の質を向上させ得る報告であったと考えられ, 有意義な議論を行うことができた.